

貞操の高きと世の人のもてはやしてやまざるもまた宜なる哉宜なる哉。

蘆湖紀行

東京和歌子

地圖を披きて箱根山頂に蘆湖あるを見、寫真石版を見て、芙蓉の峯の湖上に倒立せるこれぞ箱根の倒富士よ、など人の語るを聞くごとに、いかで一度はかゝる勝をたづねばや、とはこれのれ年頃の願なりき。さるを今年の夏うれしくも其望はみたされぬ。いでや蘆の湖のために其勝を語らんか。

八月そのの日、朝どく起きいで、登山の用意し、七時同行五人と共に箱根底倉なるやどり梅屋をいづ。駕に乗りてなり。生れてはじめてかごといふものに乗るこゝち、めづらしくおもしろし。宿の

主人どかごやより懇にのりかたを教へられて、からうじてかゝみ入る。友はと見ればはやらたくみに乗りて、かつぎ上げられたり。れもはず顔打見合して笑ふほど、これの駕も宙に上りぬ。かくて六挺の駕は一すぢになりて蘆湖に向ふ。かごや、けふは雨ならん、などいふに、箱根の山奥に雨にあふ又れもしろからずや、などいひひくゆられくゝて行く。進むに従て霧起る。雑木の繁茂せる坂路を登り行くこと、十餘丁にして小湧谷をよぎる。こゝは七湯以外の新温泉場にして、海面をぬくこと凡そ一千七百四十尺といふ。

小湧谷を経て進む行くに、道いよゝけはしく霧ますます深し。登るに従て暑さを忘る。げに箱根八里の歌にあるかごとく、雲は山をめぐり、霧は谷をどざし、羊腸の小徑は苔滑なり。いはゆる

方丈ほうじやうの山千仞やませんじんの谷たにまのあたりわれらに箱根はこねの險けんを示ししがばなるいといさまし。雲霧うんか深ふかければ遠とほくは見えず、來りてはじめてそこに道みちあり谷たにあるを知るのみ。さながら雲くもをわけて天上てんじやうに登のぼるがごとし。

世よはなれしこゝちこそすれ箱根山雲居はこねやまぐもをの中なかをわけつゝ行ゆけは

されどまを世よをはなれしにはあらざりけり。小湧谷わらだにをいで、十餘丁じゆぢやうにして、池尻いけじりといふ處ところに至いたれば、世よの中なかめきたる茶店ちやてんあり。かゝる山中やまじかにも住すひ人はありけり、とぞればえし。即すなはちこゝに休息きゆうきす。駕かに乗りて以來いらいはじめて顔かほを合せたれば、友ともどちと道みち々々のことなどかたりあふ。

池尻いけじりにしほしやすみて、かごや又息杖またいきづえとりわけぬ。はたして小雨こさめふりいでたり。雨あめの箱根はこねまたよし。たゞかごやのぬるゝが氣きの毒どくなり。十丁じゆぢやうばか

りけはしきところをのぼりく、雨あめと霧きりと草くさどもれつゝ行ゆけば蘆あしの湯ゆに達たつす。こゝは七湯中最高かうしよ處ところにありて、海面かひめんをぬくこと凡およそ二千七百六十尺しやくといふ。げにも肌寒はださむさばかりなり。あはれ高たかくも登のぼりけるかな。

蘆あしの湯ゆをよざりて、又昔滑またせきなめらかなるけはしき路みちを登のぼること二十餘丁じゆぢやうにして元箱根もとはこねに至いたるべし。此間このかんに名所めいしよ多おほし。

曾我兄弟そがぢやうだいの墓はか 蘆あしの湯ゆよりゆくこと五六丁ぢやう、道みちの左小笹ひだりそさぎの中なかに、大だいなる二基ふたきの石塔せきたつあり。これ兄弟きやうだいの墓はか。傍かたはらに小ちひささがあるは虎とらの墓はかなり、どかごや鼻はならむめかす。

多田満仲ただまんぢゆうの墓はか 道みちの右みぎにあり、此奥このおくにといふ木標もくべうのみを見てよぎる。こゝでは錢ぜになしでも饅頭まんぢゆうが買かへる、どかごや笑わらふ。地下ちかの満仲まんぢゆう何なんどか

さくらん。

精進池 しやうじんけ こゝどはさげど霧深くして水少しも

見えず。

石地藏 いしぢざう 道の左側に高さ一丈餘の自然石にき

ざめる地藏様の座像なり。脊には大岩石を負ひ
たまへり。これぞ弘法大師様の御作、どかどや
の鼻また高し。

御状石 おじやうせき 五圍ばかりもやわらん高六尺ばかり

の石なり。頼朝公が山中歴遊の時書状を見られ
しどころとぞ。

二子茶屋 ふたごぢや 山上に只ひとり、さみしくもを、

しくも立てる掛茶屋なり。晴れたらんには、蘆

湖頭にそびゆる塔ヶ島の離宮を望み、二子山の

麓にある養池を見下し眺望佳なり、とさげど、

けふは霧深ければそれかと思ふものも見えず。

只ゆかしがりて過ぎぬ。

(ついで)

幼稚園

東京 小島 たつ子

雪には、えむ梅が香も霜におひるといふ菊の花
も、二葉の初めより心して培ひてこそ、一しは色
も香もめでたけれ。かよわき二葉の嫩芽のいつく
しみ養はるゝことなくば、いかで雪霜にたふるは
まれを得るに至るべき。あはれ非情の草木すら、
然るを、まして情あり、しかも萬物の靈たる人を
おぼしたつるにふいておや。されども、世には、
時に或は無智にしてさる心得なき親、また或は一
家の事しげさまゝに心ならざる親などありて、こ
のいとも心を用ふべき、忽がせにすべからざる幼
児教育の行はれざる家庭の多きをもて、これを憂